

会計の監査業務における AI 導入の可能性とその展望

小城 由旭

本研究の目的は会計における監査業務に対しての AI 導入の可能性の調査である。現代社会において進行が加速している AI 技術の導入は会計分野においても例外ではなく、会計ソフトにおける帳簿の自動入力や計算等の分野においては当たり前のものとなっている。しかし監査人の主体的な評価が必要とされる業務である監査の分野においては自動化される余地は現状では少なく、先行研究も他分野に比べ少ないと考えられる。本研究では監査分野に対して AI がどのような効果を発揮するかについて、先行研究の内容の精査だけでなく特に監査人による質問の作成の補助の観点から生成系 AI の具体的な利用と監査業務に携わる人々に対するアンケート調査等の手法を用いて調査を行うものである。これらの調査や分析の結果を踏まえ、本研究では以下の三点を明らかにした。

1) 一連の先行研究の内容の精査から、実際の利用に対しては具体的な問題点は技術面だけでなく倫理面にも存在しており、また監査人の情報技術に対する知見は今後更に進むべきである。

2) 現時点での ChatGPT の具体的な試用例から、特に監査業務における監査人の質問作成に対して生成系 AI がある程度利用可能であると考えられる。

3) アンケート調査の結果から、監査業務に対する AI 等の導入に対しては若年層において比較的ポジティブに受け止められている一方で、懸念点としてプライバシーの保護や実現した際の法整備があまり進んでいないという意見が存在する。

これらの内容は先行研究や本論文冒頭にて示した予測を概ね支持する結果となっているが、調査の過程で文章の分析における生成系 AI の傾向やフェールセーフな仕組みづくりに関する新たな知見を得た。また今後の課題として、個人情報の取り扱いやデータ保護に関する法的な側面の精査や、公認会計士に対するより詳細な聞き取り調査対象の拡大、また実践環境での具体的な利用を踏まえた調査などを行うことによる正確かつ専門性の高い研究が必要であると考えられる。

実際の業務での導入はこれらの精査が全て完了し、かつある程度の責任や法的な正当性を担保してから行われると考えるのが自然であるため、本テーマにおいて学術面が実際の業務に対して大きな寄与を果たす可能性は非常に高い。それゆえ今後情報分野に関して更に進行していくであろう生成系 AI の研究、特に本テーマに関連したような監査に関するものを注視することが、実際の業務だけでなく会計そのものの概念の進歩に対してもよい影響を与えると期待できると本論文では結論付けられている。

(指導教員 辻 慶太)